

杉崎泰一朗著
『修道院の歴史 — 聖アントニオスから
イエズス会まで』
(創元社, 2015年)

上 條 敏 子

本書の著者の杉崎泰一朗氏は、修道院文化研究の泰斗であり、長らく藤女子大学で教鞭をとったあと、中央大学にうつり、『一二世紀の修道院と社会』（原書房、1999年）によって、学位を取得したのちも、海外と日本をゆききしながら、ヨーロッパの修道院文化を研究、紹介してきた。

おわりに、でもかかれているように、ヨーロッパの修道院文化に関する概説書や通史としては、古くは、1970年の、今野國雄『修道院』（近藤出版、1970年）と同『修道院 — 祈り、禁欲、労働の源流』（岩波新書、1981年）また、朝倉文市、『修道院』（講談社現代新書、1996年）があり、現在まで読み継がれている。また、著者自身も修道院文化については、これまでも、前掲の学位論文のほかに、『ヨーロッパ中世の修道院文化』（NHK出版、2006年）を公にしており、著者は、「これらをもって豊穡なこの分野に新たな一冊を加える隙間があるだろうか」という懸念をもちつつ、本書を執筆したという。しかしながら、今野、朝倉両氏が活発な文筆活動をおこなっていた年代からはかなりの年月が経過しており、この間、ことに初期修道制にかんしては、戸田聡氏のような専門的研究者が質の高い研究を発表するにいたっている。研究者としての、その卓越した識別眼により選ばれ翻訳された、カール・ブーズー・フランク著、戸田聡訳『修道院の歴史 — 砂漠の隠者からテゼ共同体まで』（教文館、2002年）も、日本語で読める一冊に加わった。拙訳サザーン著『西欧中世の社会と教会』（八坂書房、2007年）のような中世教会史のよく知られた概説的通史が日本語で読めるようになったことも研究環境の変化

として特筆できる。こうした変化を踏まえれば、いまの時点で、新しい研究を加える意義はあるだろう。

ありていにいって、修道院文化の研究を始めるにあたって、読むべき基本的文献のリストは日本語でもすでにかなり長くなっている。そういった環境のなかで、著者は、オリジナリティーのだしかたに苦慮した様子であるが、今野國雄氏、朝倉文市両氏の著作との比較の点からは、両氏が執筆した当時の定説であったシトー会登場の背景としてのクリュニー修道院をめぐる状況に対する近年の反駁を積極的にとりこんでいる点に氏ならではの長があることは断言できる。また、巻末の文献目録で、主要な関連文献をコメントつきで紹介している点は、新たに研究にとりくもうとする学徒に対して親切な作りとなっている。

近年ヨーロッパは日本人にとって決して遠い国ではなく、比較的安価にそしてあまり長時間の空路をへずに到達できる地域となったために、現地調査をおこなうことが容易になってきているが、杉崎氏は近年の研究者が有しているこのメリットを最大限に発揮している。百聞は一見にしかずというが、実際に訪れてみて感じ取れるものを写真を介してでも伝えようとする姿勢が、随所にちりばめられた図版からは強く感じとれるのである。また、構成上の工夫としては、修道院建築を平面図や複数の写真の組み合わせで表現しようとしている箇所、一日の日課がわかるように記述している個所が充実しており、シャルトルーズの修道士が、一日の相当部分を筆写にあてていたなど、読書や筆写が修道院の生活のなかで大きな比重を占めていたこともわかる。

さて、前置きが長くなったが、本書の章立てを紹介しよう。

はじめに

第1章 修道院のおこりと西欧への伝播

第2章 ベネディクトゥスの『戒律』の成立と西欧への定着

第3章 『戒律』の定着と中世修道院文化の萌芽

第4章 クリュニー修道院の成立と発展

第5章 シトー修道院の改革

第6章 ラ・グランド・シャルトルーズ修道院の「大いなる沈黙」

第7章 社会活動へ向かう修道院

第8章 托鉢修道会

第9章 ルネサンス、宗教改革、そして近代

古代エジプトの隠遁生活に起源をもち、現代まで脈々と受け継がれてきた修道制を担った修道士の活動は、写本による学問の継承、生活の糧を得るための生産活動、女子修道院の設立、海外宣教など多岐にわたっているが、本書は、その原初から近代のイエズス会の活動までを通観するものとなっている。また、類書の多くが、中世末でその記述を終わっているのに対して、ルネサンス、宗教改革、そして近代を扱う章をおいているのは、新しい試みだといえる。そしてこのような構成をとるかぎり、本書は、修道院 *monasterium* の歴史ではなく、修道制 *monasticism* の歴史というべきであるが、本書のタイトルが、修道制ではなく、修道院の歴史となっているのは、読者になじみのない用語を避けたためなのだろう。西欧中世に特徴的にみられた共住型の修道生活の起源は、パコミウスにさかのぼるにすぎないし、托鉢修道会以降は、修道士の住まいは、修道院ではなく、「生活のための集会所」*conventus* に代わってしまっているからである。また、この書は、「修道院の歴史」と銘打っているものの、あくまで西欧のキリスト教の、より限定的に言えば、ローマ・カトリックのそれに対象が限られており、カトリック教会と並ぶ東方ギリシャ正教会の豊かな修道生活と修道院はその対象となっていない。

本書のこのような構成は、著者の専門ともかかわっているだろう。著者自身があとがきでことわっているように、著者の専門は一二世紀である。このために、一二世紀に隆盛を誇った修道院、なかでもクリュニー、シトー、ラ・グランド・シャルトルーズに関する記述が最も詳しい。そこで紹介されるのは、中世史関係の書物などでときおり強調される退廃した修道士像とは異なり、規律ある生活によって、多くの有力寄進者を後ろ盾にすることに成功した中世中期の修道院であり、写真と叙述はその勢いをまざまざと伝えて興味深い。さらに、7章では、アルブリッセルのロベールの活動からうまれたフォントブロー修道院、プレモントレ会、ホスピタリエル(病院修道会)、騎士修道会など、これまで一般にはなじみの薄かった修道会が紹介される。

そして、そのうえで、「修道院の歴史のなかで、修道士が定住生活をや

めて自由な移動が認められるようになって民衆のあいだに入っていくことについては、(中略)一三世紀のフランシスコ会やドミニコ会など托鉢修道会をその画期とするという理解が従来から強く、それは、ベネディクトゥスの『戒律』に従う修道院の富裕化や墮落に由来するものと考えられてきたが、「現在では、(中略)托鉢修道会出現前の諸勢力の役割が重視される傾向」とする。もちろん、ここで言われている、托鉢修道会の登場と従来 of 修道院の富裕化についていえば、そもそもがドミニコ会の隆盛のきっかけとしては、既存の教会組織のなかの司教以下の聖職者の贅をつくした行列や典礼の様子が、質素にくらす南フランスの民衆の感性にあいれず、異端カタリ派の隆盛をきわめたこととの関連が知られており、かならずしも、その登場と成功は、既存の修道会の失敗のみと結び付けられるものではない。

とはいえ、「アッシジのフランチェスコの劇的な生涯や、ウンベルト・エーコの『薔薇の名前』は、托鉢修道会の革新性を強く印象付けるが、(中略)彼らの活動は、一二世紀にさまざまに試みられた刷新的な動きの上になつたものである」(219頁)という本書の理解自体は否定されるものではない。実際、どのような動きにもある日突然ということはなく、それにさきだつ萌芽期がみとめられるものだからである。それを踏まえたうえであえていうなら、一三世紀の萌芽を一二世紀にみいだしているのは、一二世紀を専門とする著者ならではの視点というのがふさわしいのではないか。なんとなれば、一三世紀には一三世紀ならではの社会経済情勢があるのであり、サザーンが『西欧中世の社会と教会』で、いきいきと活写したフランシスコ会の革新性が、本書の登場により根本から覆るわけではないからである。一三世紀を専門とする筆者からみれば、都市の本格的成立をみた一三世紀をまって托鉢修道会を受容する条件がそろうにすぎず、フランシスコ会、ドミニコ会のめざましい発展は、都市の本格的成立と、教皇権威のかつてない高まりと野望を背景としていたというほかない。刻々とうつろいゆく中世のなかで修道院が盛衰を繰り返す様子は、基本的には、サザーンが描いたものから大きく乖離していただけてもないだろう。したがって、杉崎氏の主張は、従来 of 理解に、著者自身の研究を含めた昨今の修道院研究が付け加えたマイナーな変更としてとらえられるべきなのである。

杉崎氏が『一二世紀の修道院』でみせた、クリュニー修道院に関する新たな知見は、めざましいものであった。その衝撃的インパクトは強調して強調しすぎることはないが、修道院の富裕化などに関しては、まったくなかったように論じることはむずかしいということは理解しておかなければならない。実際、シトー会登場のインパクトと両修道会の対比的性格については、これまで、以前の定説を知らない読者が、最初に杉崎氏の『一二世紀の修道院』を読んだ場合にその意味を理解できない懸念があったが、本書では、クリュニーを訪れたクレルヴォーのベルナルドゥスの体験したクリュニーの豪華な食事、実際にみた聖職者の衣装に関する報告についての著名な史料も、適切に紹介され、バランスのとれた記述に変更されている。

具体的には、149頁から150頁にかけて紹介されているベルナルドゥスの見聞記にあらわれたクリュニーの豪華については見たままの印象なのだと思えない。クリュニーの子院まで豪華な生活をしていたのかはともかくとして、修道院が貴族のものであった当時において、本院の富裕度は相当のものであったと考えるのが妥当であろうし、ベルナルドゥスの報告に多少のレトリックはあるにせよ、基本的には、クリュニーに対する寄進が相当のものであり、元来、禁欲的生活の実践としてはじまった修道生活の起源から、相当程度はなれた生活が中世ヨーロッパに出現していたことについてまで疑うことはできないのである。

他方、2015年に出版された小田内隆『異端者たちの中世ヨーロッパ』の後半部分では、現代における正統と異端をめぐる文書の存在状況について、歴史上はじめて、カトリック側がだしている文書よりも、新教側でだしている文書のほうが多い事態を現在迎えていることが指摘されている。修道院の存在価値の否定については、宗教改革をはじめたルターにその最たるものをみることができるが、彼は、救いにあたって、修道院の生活は役に立たないことを主張し、修道誓願をやぶって還俗し、妻をめとった。ルター派以外でもイングランドでは、ヘンリー8世が国教会の樹立を宣言して、ローマ＝カトリックとたもとをわかった際、国内の修道院を閉鎖しその財産を没収した。そしてこのイングランドの例では、その動きを正当化する目的でも、修道士の退廃について多くが語られた¹。そういったプロパガンダの伝統をうけて、今日でもイングランド

をフィールドとする研究者は、中世の修道士に対して、ゆえなき偏見をもっている場合が少なくない。

その結果、修道士の退廃に比較して、その熱意については理解していない研究者が多いのが、近年の特に英語圏の動向であったともいえる。そういった全般的な言語状況のなかで、聖人伝という史料類型をあえて積極的に活用して、歴史のなかの修道士の姿をうかびあがらせようとする新しい研究状況が、1990年代より始動していたが、後者を積極的にとりいれている点を本書のもうひとつの特徴として指摘できる。より具体的には、杉崎氏が、最初の修道士たちと認定している、エジプトのアントニウスを中心とする一群のひとびとについていえば、まさしく、12世紀にクレルヴォーのベルナルドゥスが、自らの範とあおいだひとびとであり、わたしたちは、今回の杉崎氏の著作により、中世にいきた修道士がもっていた、理想としての修道士の姿をまず脳裏にやきつけたうえで、同じ思いから修道生活にまい進した幾多の修道士のあとをたどることができるのである。

古代から現代まで修道制は連続している半面、中世にあつては、キリスト教は支配者の宗教であり、修道院も支配階級たる貴族のものであつた。ひとびとが修道生活にむかった理由については、各論あろうが、土地を基盤とする農業社会にあつては、生産力の向上には大きな制約があり財産の分割を防ぐために、貴族層にあつても一定割合の子孫を単身生活にふりわける必要があつたことはさまざまな論者により指摘されている。だからこそ、中世中期の修道院は貴族出身者にしめられ、権勢を誇るかのような生活も営まれたのである。社会情勢がまったくことなるなかでの、修道院の位置、それはまったくことなるものでしかありえない。修道院史を銘打つ以上は、そのような視点も必要であろうが、本書が、社会情勢への視点を欠いた修道院史にとどまってしまっている点は、古代から中世そして、近代以降までの流れをつかむうえでの障壁となっていると思われる。一冊のなかで修道院史をまとめることの困難を改めて

¹ この問題については、拙訳、M. オリヴァ「危うい移行：修道院解体期の修道院の状況と世俗復帰」（『藤女子大学キリスト教文化研究所紀要』11号、2010年、117-138頁）の冒頭でも触れられている。

思った。

そして、繰り返しになるが、古代より連綿として続いてきた求道者の営みを丹念に紹介しようとする試みが本書であるとするならば、本書は、やはり、修道院の歴史ではなく、修道制の歴史なのである。ではあるが、修道院の歴史としてみた場合にも、祈祷と典礼を重視したクリュニー、独自の美意識のもと修道院改革に取り組んだシトー、独居生活と共住生活の融合をめざしたラ・グランド・シャルトルーズなど、個別の修道会の特色も、つかみやすく、戒律や慣習律などの紹介も丁寧で、この分野に関心のあるむきにとって本書が有益であることは間違いない。本書が多くの読者に読まれることを願っている。

最後に、中世の修道院にかんして、いささか踏み込んで研究した同朋としての立場から、つけくわえさせていただくことをお許しねがいたい。杉崎氏の研究の本邦学界への最大の貢献は、『一二世紀の修道院と社会』によって、クリュニー修道院が、フランス中心にクリュニー帝国ともいえる実態をきづいていたことを明らかにしたことであった。このクリュニーには大きな免税特権があたえられていたが、そのことと、その後の時代のなかで、フランスがカトリックにとどまり、ローマの牝牛とよばれ収奪の対象であったドイツで宗教改革がおこり支持されたことの間に関係があるのか。今後、氏が何らかの形で示唆してくれることを期待している。